柿生文化

柿生郷土史料館　情報・研究誌
住所：川崎市麻生区上麻生 6-40-1
柿生中学校内
電話：070-1503-6401、044-988-0004
http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo
第 91 号

←新しくホームページが開通いたしました。どうぞご活用ください。なお旧ホームページのアドレスも残っていますのでご注意ください。

江戸時代初期、日本人が知った世界の人々

=====そこには不思議な国々があった=====

図Ａ

日本では 2020 年のオリンピック開催を控え、「おもてなし」の合い言葉のもと、海外の人々とのつながりと、国際理解が重要な課題となってきています。

江戸時代は、海外との交流を閉ざした「鎖国」の時代でした。そんな時代の人々だからこそ一般庶民たちは、海外にどのような国があり、どのような人が住んでいるのか関心が高かったようです。

江戸時代初期、よく読まれていた本に、「訓蒙図彙(きんもうずい)」があります(図Ａ)。今の百科事典のようなもので、中国の「三才図絵」に影響を受けたといわれ、天文・地理・動植物・人物など多分野の事柄を挿し絵入りで説明した 20 巻の大冊です。

それでは、訓蒙図彙に紹介されている海外の国々を紹介してみましょう。＊中国(図Ｂ右)、＊琉球(りゅうきゅう=現在の沖縄=図Ｂ中)、＊朝鮮(図Ｂ左)。＊南蛮(なんばん＝図Ｃ右)古くは東南アジアの国々を指していましたが、この本では、スペイン・ポルトガルなどのヨーロッパを指しているようです。＊東夷(とうい=図Ｃ中)中国東北地域に居住していた異民族です。昔、日本の東北地域に居住していたエゾもそのように言われました。＊呂宋(るそん=フィリピン=図Ｃ左)。＊天竺(てんじく=インド=図Ｄ右)、＊蒙古(もうこ=モンゴル=図Ｄ中)、＊粛慎(しゅくしん・みしはせ=図Ｄ左)現在の中国東北部に住み、女真とも言われました。＊安南(あんなん＝図Ｅ右)現在のベトナム中・北部で交趾(こうち)・東京(とんきん)とも言われました。＊暹羅(せんら=現在のタイ=図Ｅ中)、＊東番(とうばん=図Ｅ左)現在の台湾を指し、高砂族が住んでいたことから「たかさご」とも言われました。　＊崑崙(こんろん=図Ｆ)元々この名称は中国古代の伝説上の山で中国西方にあり黄河の源流地域とされています。一方、アフリカ系黒人に対する呼称という解釈もあります。説明には「西南の海上にあるその国の人、色黒く黒漆の如し、世に色黒き者を崑崙坊という」と記しています。「西南の海上」とありますからアフリカ大陸ではないと思います。昔の記録によるとインドシナ半島南端より約 100km 沖にある小島を「崑崙山」(現在のベトナムのコンダオ島か?)と呼んでいましたので、そこを指しているのかもしれません。また、色の黒い人を「崑崙坊(こんろんぼう)」と呼んでいたそうですが、これは後世、日本では黒人を「くろん坊」と呼ぶように変化したものと考えられます。＊占城(せんせい・ちゃんぱ=図Ｇ)現在のベトナムの南部にあり、説明には「公事訴訟あれば容疑者を鰐に会わせて、罪があるならば鰐に食われる」(一部意訳)と記述されています。

図Ｂ

図Ｃ

図Ｄ

図Ｅ

図Ｆ

図Ｇ

以上、ここまでは存在が明らかな国や地域ですが、次の４つの国(人種)は所在が不明で、謎に包まれた人々の存在が記述されています。　【４ページに続く】

シリーズ
「麻生の歴史を探る」 第 61 話

麻生の寺院(11) 東林寺、淨慶寺、戒翁寺

小島　一也（遺稿）

上麻生には「東林寺」と呼ぶ片平修広寺兼務の寺があります。新編武蔵風土記稿（以下風土記と記す）には「除地二段五畝歩、禅宗曹洞派、片平村修広寺末、麻生山と号す、客殿六間半に五間坤（西南）を向く、本尊薬師如来像二尺八寸、稲荷白山明神合祠、本堂の乾（西北）にあり・・・」と記され、寺の縁起には、開山修広寺第四世月秋文伯和尚（慶長四年 1599）寂す、とありますから戦国時代末期、関ヶ原の戦いの頃に創建されたことになり、そこには農民による神仏混仰の稲荷白山明神が祀られていますので、天下分け目の戦いもこの地には関係なく農民の寺であったことが窺い知れます。

東林寺

後にこの寺は火災にあい、文化八年（1811）檀徒の滝沢友次郎が本堂を再建したとの記録はあるものの、無住の時代が続きますが、本堂内陣須弥壇は堅固で、本尊薬師如来像はじめ諸尊像は今も保持され、白山明神の祠は消えたものの境内には樹齢 300 年に及ぶ銀杏の大樹(市の木 50 選)が寺歴を伝えています。

浄慶寺

この東林寺に隣接して在るのが紫陽花（あじさい）寺で有名な「淨慶寺」で、風土記では「除地二段五畝歩、浄土宗橘樹郡小机村泉谷寺末、瀧澤山春林院と号す、開山證蓮社誠誉順阿長應元和元年（1615）十一月卒す、開基は当村の地頭法名寿光院清譽淨慶居士、これも開山と同じく元和元年卒すと云う、客殿六間四方西向きなり・・・」と記しています。

したがってこの寺の創建は、江戸時代初期、上麻生村を知行した徳川家の旗本三井吉正（法名淨慶）に依って造立されたとのことで、石高 15 石を寄付されたと風土記は述べており、この三井氏は遠州にも知行地が在り、遠州秋葉三尺坊を勧請して境内に祀ったのが秋葉祠（秋葉神社）で、火伏せの神として信仰され、今でもその講は残っており、参道には歴史を刻んだ貴重な石造物が集められており、ユニークな石仏が参詣者を楽しませています。

なお、風土記では淨慶寺の山号を瀧澤山、前記東林寺の山号を麻生山と記しており、市の社寺調査資料には麻生山淨慶寺とあり、東林寺の山号の記述はありませんが、淨慶寺を瀧澤山とするのは不可解で、私寺的な東林寺のほうが瀧澤山ではないでしょうか。

この淨慶寺と同じく村の領主が建立したのが早野の「戒翁寺」で、風土記では「禅宗曹洞派、片平村修広寺末芳林山と号す、開山貴山玄頓天正十九年（1591）寂す、開基は此処の地頭富永主膳正源光吉正保三年（1646）卒す、客殿七間半六間半西向きなり、本尊如意輪観音、慶安二年石高五石五斗の御朱印を賜る・・・」と記述しており、この開山貴山玄頓和尚は修広寺の三世で、光吉（寺伝では重吉）は長命を保ち、天正年間（1573～92）に戒翁寺を創建、幕府の要職を務め正保三年 96 歳で没しています。その墓が戒翁寺前に今も残る殿様の墓で、そこには重吉（正保三年 1646 銘）、妻、長男、三男の五輪塔が檀徒の手によって保存されています。

戒翁寺

なお、この寺の地は海抜約 50m、鶴見川流域に突き出た縄文弥生からの遺跡で、寺の起こりは極めて古いものとされ、秀麗な富士丹沢連峰を望み、天歴元年（947）京都の歌人が草庵を結び、養和元年（1181）堂宇が焼失、応永十五年（1409）順覚と称する僧が寺を再建（地元伝承、早野満書留帳）したと言われ、時世、地勢から古戒翁寺が在って不思議はなく、現在、聖地公園に伴う戒翁寺台原遺跡調査が行われていますから、何かの発見があるかもしれません。

参考文献：「麻生の神社と寺院」「新編武蔵風土記稿」「歩け歩こう麻生の里」「七つの池とともに」

シリーズ
時間と時計の話 第１部

和時計と西洋時計（６）

小林　基男（柿生郷土史料館専門委員）

◆機械時計の伝来◆

ザビエル神父が大内義隆に柱時計を献上した、およそ 40 年後の 1591 年に、今度は時鳴鐘と呼ばれた置き時計が豊臣秀吉に献上されています。九州のキリシタン大名らによって西欧に派遣された、伊藤マンショら４人の「天正少年遣欧使節団」一行が、1590 年に帰国、翌 91 年３月に聚楽第に秀吉を表敬訪問し、西洋土産として秀吉に献じた品々の中に、西洋の楽器などと共に置き時計が記録されています。しかし、この時計もまた、豊臣氏の滅亡と共に歴史の闇に葬り去られたのか、現存しておりません。

現存する最古の西洋時計は、久能山東照宮に大切に保存されている置き時計です。この時計は、1611 年にスペイン国王フェリペ３世から、家康公に贈られました。1581 年にスペインのマドリッドで、当代最高の時計師ハンス・デ・エバロが当時皇太子であったフェリペ皇子のために製作した、国王愛用の時計でした。

久能山東照宮にある家康公の時計

当時のスペインは、ポルトガルをも併合しており、アジア各地や中南米一帯を植民地として支配下に置く、欧州最強の国家でした。そんな強国スペインの国王が、何故自ら愛用する大切な時計を家康に贈ったのでしょうか。そこには当時スペイン領だったフィリピン総督ロドリゴ・デ・ビベロ（略称ドン・ロドリゴ）一行の海難事故がかかわっています。いきさつはこうです。

1609 年のことです。フィリピン総督ドン・ロドリゴは、フィリピンでの任期を終え、次の任地に向かうための国王の命令書を受領するために、一路メキシコへの航海に出ておりました。７月下旬、航海中のドン・ロドリゴ一行は、折からの台風に巻き込まれ、操船機能を失って漂流することになり、外房の御宿付近（当時は岩和田村）の浅瀬に乗り上げ、座礁してしまったのです。これを見た周辺の漁民たちは、総出で乗組員の救助にあたり、373 人の乗組員の内、317 人を助け出したのです。その中の１人が総督ドン・ロドリゴその人でした。岩和田村が属する大多喜藩主本多忠朝は一行を歓迎、ロドリゴ一行を駿府の大御所家康の下に、送り届けました。ドン・ロドリゴは家康に面会を許され、その博識を多とした家康は一行を歓待、一行の日本滞在に便宜を与えると共に、通訳兼外交顧問として重用し、外航用の帆船の建造も任せていたウィリアム・アダムス（日本名三浦按針）に建造させた中型帆船を、ドン・ロドリゴに貸与し、彼ら一行のメキシコ経由での本国への帰還を助けたのです。

難破したドン・ロドリゴ一行を救助する漁民たち
（千葉県御宿町歴史民俗資料館蔵）

ロドリゴ一行は、温情溢れる家康の好意に感服し、帰国後国王フェリペ３世に面会を許された折には、口々に家康公への感謝の念を語ったのです。ロドリゴの報告に感銘を受けたフェリペ３世は、早速答礼の使節を日本へ派遣する事を決定すると共に、部下を助けてくれた家康への感謝の念を示すために、愛用していた置き時計を家康へ寄贈する決断を下したのです。こうして、1611 年フェリペ３世の答礼使節の手で、置き時計は家康の手に渡ったのです。

家康はこの時計が気に入り、亡くなるまで手元に置いていました。しかし、当時の日本は不定時法の国ですから、定時法で時を刻む西洋時計は実用の時計にはなりえません。そのため、家康の死後造営された久能山東照宮に、家康公愛用の品として納められたのです。しかし、利用価値のない時計は次第に人々から忘れられ、久能山東照宮の収蔵庫で、長い眠りに就いたのです。このことが家康の時計の価値を飛躍的に高める事になったのです。

現在、1580 年代以降の 16 世紀末に作られた西洋時計は 50 個程が現存しています。しかし、家康の時計を除く時計はどれも実用に供され、長い間使い続けられた結果、そのすべてが故障するたびに新品の部品に取り替えられ、外形は当時のままでも内部の部品は、ほとんどすべて後世のものに置き換えられてしまったのです。つまり、久能山東照宮の家康公ご愛用の西洋時計は実用に供されず、純粋に装飾品として扱われ、やがて忘れられて長い眠りに就いていたおかげで、16 世紀後半の姿を、外形だけでなく全ての内製品についても、ほぼ完全な形で持ち続けた世界にたった１個しかない時計として、世界中から垂涎の眼で注目されることになったのです。

追記　家康公の時計は、昨年５月、大英博物館の時計部門の責任者であり、世界的な時計研究者であるディビット・トンプソン主任学芸員による、細部にわたっての分解調査が行われました（日本には、古い時代の西洋時計を鑑定できる人物がいないからです）。その結果、部品の 99%以上が、16 世紀当時のままのオリジナル部品であるとの鑑定結果が出されました。まさに世界的な貴重品となったのです。　（続）

（参考『家康公の時計　四百年を越えた奇跡』）

なお、史料館では来秋の史跡見学バスハイクで、久能山東照宮を訪ねる事を計画しています。

【１ページから続く】

＊長臂(ちょうひ＝図Ｈ)説明には「海の東にあり、国の人は手長くして地につく布を衣にしている。たけは一丈三尺八寸(約4m35)」と書かれています。「臂」は腕の事でしょう。「たけ」というのは背の丈なのか布の長さなのかよく分かりません。布の長さならばインドのサリーのようなものを体に巻き付けていたのでしょうか。更に「臂無き国もあり無臂国という。臂が一つの国もありそれは一臂国という」と書かれています。＊長脚(ちょうきゃく=図Ｉ)説明には「足長き国なり。よく走ること犬の如し」と書かれています。＊長人(ちょうじん・せいたか・たいじん=図Ｊ)説明には、「風に船を吹き流され、ある島に漂着した人によると長人は泳ぎを得意としていたと記しています。中国の「三才図絵」には中国の伝説上の人種で海の島に住んでいて身長が 3～4 丈(約 9～12m)の巨人で移動はとても早いと記しています。最後に*小人(しょうじん=図Ｊ)説明には「この国東方にあり背の丈九寸(約 30cm)、鶴に飲まれることを恐れ、一人で歩くことはない。したがって多くの仲間と連れだって行く」というようなことが書かれています。

図Ｈ

図Ｉ

図Ｊ

以上の４国(人種)は、中国の「三才絵図」にも同様の国が描かれており伝説上の国と思われます。それ以外の国については日本の歴史資料の中にもたびたび登場してくるもので、ほぼ実在の国　(人種)であったと考えられます。しかし情報が乏しい上、想像上の事柄も多いようで、すべてを信用するわけにはいきません。いずれにしても説明書きも、挿し絵も、当時の人々の興味関心を高めるには絶好の書物であったようです。さらにこれらの情報が江戸文学の一端を担ったことも間違いのないことです。

(主史料:「頭書増補訓蒙図彙巻四」・参考資料:東洋文庫「和漢三才図絵」)　（文:板倉）

柿生郷土史料館 12･1 月催物案内　【入場無料】

◎開館日：偶数月は毎土曜日、奇数月は毎日曜日　（原則として月４回）

12 月　5･12･19 日（毎土曜日）　**1 月**　10･17･24･31 日（毎日曜日）

◎開館時間：午前１０時～午後３時　(12 月 26 日、1 月 3 日は休館です)

第 59 回 カルチャーセミナー　鶴見川流域文化探訪 8
入門　鶴見川流域史 5(中世編その 3)

鶴見川流域史を古代・中世・近世で考えるシリーズ第 5 弾

いよいよ中世編の締めくくりです。後北條氏の領国統治の中で、統治される側の人々の生活はどのようなものだったのか、掘り下げて考えてみます。

講師：中西望介氏　（戦国史研究会会員）

日時：12 月 19 日（土）午後 1 時 30 分～　会場：柿生郷土史料館特別展示室

第９回 特別企画展　「江戸名所図会」に見る江戸と川崎

江戸名所図会は幕末に近い天保年間に刊行された江戸並びに近郊の川崎、横浜、大宮、船橋などを含めた町の地名由来や、名所を紹介する観光案内書です。同時に寺社仏閣の由来から祭礼風俗にまで及ぶ記述は、単なる観光案内を超えた貴重な文化風俗資料になっています。

今回は初版本全巻揃いを、千代田区立日比谷図書文化館のご好意で拝借して展示いたします。

期間：10 月 31 日(土)～1 月 17 日(日)　会場：柿生郷土史料館特別展示室

ついに完成！
ふるさと柿生の記憶を DVD 化
第１弾

「身近にあった信仰の世界と人々の思い」
◆◆◆晩秋の上麻生「秋葉講」を訪ねて◆◆◆

ご希望の方にはおわけしております。詳しくは資料館までお問い合わせください。